

講演会

「多文化共生って何だろう?」

2024年11月21日、中村ゼミでは「多文化共生って何だろう?多様性豊かな神奈川の一員として」というテーマで講演会が行われた。今回講演していただいた本学の卒業生である原梓さん、福田久美子さんは、かながわ国際交流財団(KIF)多文化共生グループにて日々神奈川在住の外国人の暮らしを支えられている。ゼミでは多言語が個人と社会環境に与える影響を学んでいるため、今回の講義はとても貴重なものとなった。

講演では、神奈川をはじめとする日本に住む外国人住民に対する理解を深め、課題の解決方法を考えるために多岐にわたるお話をしていた。はじめに、現在神奈川県に住む外国人住民の出身国はどのくらいあるかという質問がされた。驚いたことに、神奈川県には179もの国と地域から来た外国人が住んでいるという。世界の国の数は約200であるため、約90パーセントを網羅していることになる。また神奈川県で生まれる外国にルーツのある赤ちゃんは、16人に1人いる。2023年は18人に1人であったため、日本全国で生まれる赤ちゃんの数が減っているのに対して、県内ではほとんど外国にルーツのある赤ちゃん

が増加していることを示している。なかでも箱根町では2人に1人が外国にルーツのある赤ちゃんである。これは生まれた赤ちゃんの半分が将来、何かしらの課題に直面する可能性があることを示唆している。外国人が直面する課題は、大きく分けて①医療・福祉、②労働、③子育て・教育、④安心・安全、⑤日本語の5つの分野に分かれていることを学んだ。これらの課題はひとつひとつが別問題ではなく、それぞれが影響を与え合うため、容易な解決が難しいのである。そして日本人ではないからといい、全員が英語を使えるわけではないというポイントも抑えなければならぬ。神奈川県に住む大多数はアジア系の人々であり、日本語に加え英語も容易に理解できない人が多い。そのため市役所や子育て、医療機関を受診する際に言われていることが理解できないことが多い。このような環境下で生まれた外国人の赤ちゃんは、成長するにつれて親より日本語が堪能になり、本来行く必要のない場所に連れていかれて通訳をしたり、親の代わりに難しい説明を聞かなくてはならない事態に陥ったりする。この事態を避けるためには、地域社会の変化と努力が不可欠で

あるという。

講演が終わると、みんなで外国人の視点に立つためのすごろくをした。すごろくには様々な国籍の人が直面する多くの状況が書かれていた。私が特に驚いたのは、親子で姓が違うことがあり、証明することができず苦労するというものであった。自身が持つ常識は世界の常識ではないことを認識し、外国人も暮らしやすい社会づくりをしていく必要性があると感じた。

ゼミ生の感想としては、「ヤングケアラーのような存在になっている現実に衝撃を受けた。保護者説明会への参加、病院について行くなど、日本人が日本で育ったら経験しないような事態に直面しているのはどうにかしなければならぬ」と思った。「年齢を聞かれても、すぐ怒らないうべきであると感じた。日本人は失礼なことだと思ってしまうがちだが、敬意を持たれている可能性があることを初めて知った」「先人観や見た目で判断しないことが大切だと思った。まずは理解してあげることや努力をすることから始めようと思う」「やさしい日本語を学び、外国人が暮らしやすい世の中に貢献したいと感じた」などがあった。

外国語学部 英語英文学科3年 見城 佑奈

原さんは、暮らしやすい社会づくりへの対応方法は一つではないと語った。コミュニケーションの方法も絵や写真を見せる、表情で伝えるなど、こうしなければいけないという決まりはない。大切なことは相手の人に対して自分の気持ちや状況

をどう伝えるかという工夫をすることであり、これが多文化共生につながっていくという。普段当たり前前にしている生活の中には、外国人にとつて多くの障壁になり得ることが隠れていることを学んだ。どんな人でも暮らしやすい社会を作ってい

くためには、一人一人の意識と努力が欠かせないだろう。多文化共生社会の実現のために、多くのカギが散りばめられた貴重な講演であった。



講演会の様子



多文化共生のすごろくゲームを体験した